

2024年度 法学部 一般選抜

論述力 出題の意図

題材としたモーリス・クラクソン氏の著書は、歴史上に名だたる哲学者、思想家、政治家の言論をできるだけ原語を活かしながら話し言葉に再現し、架空の対話を構成したユニークなものである。この著書で扱われている主題は、どれもプラトンの時代から、国家に関する諸理論の中心に据えられてきたものであり、それゆえ大学の法学部においてはつねに問題とされるものばかりである。今回出題した「革命についての対話」においては、いずれも有名な保守主義者と左派の論客が鼎談を行っている。議論の焦点となっているのは、暴力を伴う革命という政治的行為は正当化されるべきか、そして革命後に民衆が権力を担うことは是認されるべきか、という問題である。討論者たちの格調高い議論の調子を受け継ぎながら、バーク寄りの見解であれ、ペイン、ウルストンクラフト寄りの見解であれ、2つの箇所において一貫した受験生自身の見解を語り、見事に議論に加わっているかのような答案が期待される。

問題文には、本塾大学法学部に入学した後は、教員や仲間たちとの間で是非ともこのような議論をしてほしいというメッセージも込められている。